

③ 小田島 梶子 氏（色丹島元島民）



私は 1931 年（昭和 6 年）、色丹島というところで生まれ、14 歳までこの島で暮らしました。1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日、日本が戦争に負けて終戦を迎えました。

その日は、ラジオの前に島民が集まり、天皇陛下からの「戦争に負けた」という放送を聴きました。大人たちは天皇陛下の話を聴くため、ラジオの前に集まりました。私も大人と一緒に聴いていました。島民はそのラジオを聴いて、みんな泣いていました。その後、島ではいろいろなことが起きました。

終戦を迎えた数日後、皆さんと同じように学校で勉強していたときです。突然、学校の玄関の開く音がしました。ソ連の軍人が黒いマントを着て、ピストルを持って学校の教室に入ってきたのです。今まで外国人は見たことがなく、初めて見た外国人でした。すごく恐ろしかったです。そのときはピストルで撃たれるのではないかと思いました。教室では、小学生から中学生まで一つの教室で授業を行っていました。先生の顔を見たら、目を伏せていたので、私たち生徒も静かに目を伏せました。10 分から 15 分くらいの沈黙が続きました。そのときは数学の授業中で、黒板に書かれていた算数の答えを、突然、そのソ連兵が書いたのです。恐ろしさ中に、少し和んだような気がしました。ソ連兵が学校から出ていったときは、みんなで泣きました。それはものすごく恐怖の一瞬で、この出来事は一生忘れることができなく、この歳になっても、いまだに忘れることができません。

色丹島はとにかく綺麗で、素敵で、素敵な島でした。ビザなし訪問などで北方領土へ行ける機会がありますが、今は島へ行くと、山の上まで家が建っており、昔見た風景とは変わっていて、それを見るときとても切なく寂しい気持ちになります。また、ロシア人が入ってきてから、汚い島になってしまいましたが、私が住んでいたときは、国立公園にしてもよいと思うくらい素晴らしい景色でした。私にとっては自慢の故郷です。

当時、私の家は漁師をしていました。色丹島は海の幸に恵まれた島でした。

毎日の晩ご飯のおかずは、第 2 人とおじいさんで小舟に乗り、海に網を仕掛けて捕ってきた魚をおかずとして食べていました。仕掛けた網にはたくさんの魚が捕れます。エビ、カジカ、タラ、

カレイなどたくさん捕れ、それらを隣近所に分け合って、みんなで食べていました。また、今は中国では高級食材の一つであるナマコもたくさん捕れました。

当時、島ではクジラの捕獲もしていました。シロナガスクジラ、マッコウクジラ、ナガスクジラなどを捕獲していました。いつも捕鯨船は両脇にクジラをつけて港に戻ってきます。そのクジラは家の近くにあった捕鯨場で解体されます。そのとき食べたクジラの刺身は、とてもおいしかったです。そのころ、肉といえばクジラの刺身でした。また、島の神社はクジラの顎の骨を鳥居として使っていました。とても大きな顎の骨です。現在、色丹島にはこの鳥居はもうありません。腐敗して壊れたのかは分かりませんが、今はもうありません。海苔の生産もとても盛んで、「千島海苔」と呼ばれ、とてもおいしい有名な海苔でした。

学校から帰ってくると、私の一番の楽しみはおやつでした。特に好きだったおやつは、ホタテの貝柱を干した物でした。ほかにタラの干した物、カレイの干した物などをよくおやつとして食べていました。

子供のころ、私が毎日していた家の手伝いは、お風呂炊きでした。山に行き、白樺の木を持ってきて、それを釜で燃やし、お風呂を沸かします。また、当時島では電気がなかったので、明かりはランプでした。ガラスの火屋の部分の掃除も子供の仕事でした。ほかに洗濯などもしていました。冬になると、すぐ家の裏が山なのでソリで滑って遊びました。おじいさんからもらったスキーもよく滑りました。

色丹島の中心部の斜古丹（しゃこたん）というところには、根室と通信していた無線所、役場などがありました。郵便物はここに集まり、各家庭に届けられます。

ソ連軍が色丹島に上陸したときの話をしたいと思います。戦前は穏やかに楽しく暮らしていたのですが、終戦後の9月はじめ、ソ連軍が色丹島に上陸してきました。私の家にもソ連兵がやってきました。片言の日本語を話しながら、土足のまま家に上がり、すべてのタンスの引き出しをあけて物色しました。私の家では、タンスの一番の上の引き出しに日本の国旗をたんで大事にしていました。ソ連兵はその大事にしていた日の丸の旗を真っ二つに引き裂きました。当時、祝日などの日には、玄関に日の丸の国旗を掲げていました。旗を掲げるのは私の役目でしたので、いつもその国旗を大事にしていました。その大事な国旗を裂かれたとき、ソ連兵に飛びかかろうとしたら、母が私を引っ張りました。母に引っ張られなかったら、私はソ連兵にピストルで撃たれていたかもしれません。国旗を裂かれた時の悔しさは今でも忘れられません。

終戦後、ソ連軍が上陸してから、ソ連兵とは数日しか一緒にいなかったです。ソ連兵が上陸してから間もなく色丹島から漁船で根室に出てきました。私は島から逃げてきたとは言いません。悪いこともしていないので島から逃げてきたとは言いません。

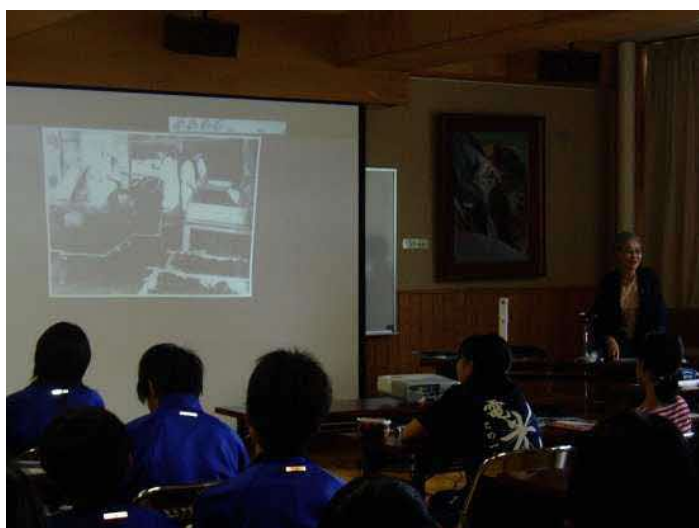
島から離れるときは、兄と2人でイネモシリというところまで歩いて行きましたが、どこからソ連兵が出てきて鉄砲で撃たれるか分からないという恐怖の中、4、5時間くらい歩きました。イネモシリで二泊し、漁船に乗って根室にきました。出航当日は、嵐の日でした。根室に着くまでは船とともに沈没すると思うくらい怖い思いをしました。私は、船の甲板に一生懸命しがみついていた。

私は一日も早く北方領土返還されることを心に願って語り部にきています。私はもう80歳になります。北方領土は日本固有の領土だから返還運動をやっているのです。

これから北方領土返還には、皆さんのような若い方の力が必要です。皆さんの若い力を借りたいと思っています。

<訪問校>

- 小樽市立菁園中学校（平成24年8月31日（金））



- 恵庭市立恵み野旭小学校（平成24年10月2日（火））



- 芦別市立上芦別小学校（平成24年11月26日（月））



- 札幌市立定山溪中学校（平成24年12月14日（金））



• 小樽市立色内小学校（平成25年1月23日（水））

